

「近代工業の先駆け」 大疇商舎の器械製糸工場

宇都宮伝統文化連絡協議会員 柏村 祐司

明治新政府は欧米諸国に追いつけ追い越せを合言葉に富国強兵政策を掲げ、殖産興業を図った。その先駆けをなす、明治初期の輸出産業に大いに貢献した製糸場が宇都宮にあった。大疇商舎による製糸工場である。

大疇商舎が置かれたのは、旧河内郡石井村大疇であり、創設等に関わったのは、川村迂叟、子の伝衛等である。迂叟は江戸の豪商で、宇都宮藩主戸田家の「山陵修補」の際、資金を無利息で融資し援助し、それにより戸田家から、禄五百石を贈られ、塩原村・船



明治42(1909)年発行(5万分の1地形図)

生村・石井村・桑島村・汗村一帯が川村家の所管となった。五百石を得た川村家では、桑園開拓に乗り出した。迂叟による慶応年間の石井村の開拓から始まり、明治二年の伝衛による石井村大疇および東汗村開拓をはじめ明治七年の鑑山村字西川原開拓に続く。開拓した桑園の総面積はおおよそ七十五町歩(約七五〇)におよんだ。

川村家の開拓は、桑園の設置だけにとどまらなかった。明治三年に蚕室二棟を建設したのを皮切りに、明治四年四月には製糸試験場と蚕室一棟を建設した。この製糸試験場は、通称石井製糸所と呼ばれ、欧州の器械を模し、人力ではあったが、初めて製糸用の器械が工場に設置されたのである。製糸所の規模は、繭から糸を紡ぎ出す糸釜十二基、工女十五人、男工三人、製糸機二十二である。工女は先に前橋製糸所に派遣し技術を習得させた。迂叟が目指したのは、輸出

この他、大疇商舎で特筆すべきは、工女を大事に扱ったことである。「大疇商舎製糸所定期修行工女規則」等に則り、工女に過剰労働・低賃金を強いることなく、福利厚生にも配慮し、年少の工女には裁縫・読書・算術等の教育および医員を常置し病気の際には治療をする等を実施した。前述の規則に「工女ノ奮励ニ係ルモノ最モ多シト云エシ」とあるが、工女の労力を高く評価したからに他ならない。

こうした大疇商舎ではあったが、明治三十三年川村家が開設した第三十三国立銀行の経営悪化に伴い、経営が他に譲渡された。大正四年には工場が閉鎖され、施設は富岡製糸工場に移され幕を閉じた。わずか五十年間の創業であったが、迂叟が目指した創業の理念は、色褪せることなく現在にも通じる。



大疇商舎全景(栃木県立博物館所蔵)